
結婚するまで

みもざみもざ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
結婚するまで

【Nコード】
N8714C

【作者名】
みもざみもざ

【あらすじ】
「私」が結婚するまでに会った人、やったこと、考えたこと、たくさん。

若い恋

幼いころからの謎。

どうしてパパとママは結婚したんだろうか。

結婚て 一体全体なんなのだろう。

それは思春期を過ぎて

自分が結婚できる環境になっても

ちつとも解決されない謎として

自分の中で生き続けていた。

生活の中で無意識に考え続けていたように思う。

部活仲間と試合の帰り

ラケットを肩にかけて歩きながら。

ゼミのレポートに追われて

真夜中に一息つこうとコーヒーを飲みながら。

平日に会社の休みをとって

昼間の電車にゆられて空を見ながら。

したい、とかしたくない 以前に

結婚の正体がわからず

わからないことは私をなんだか不安にさせた。

これがわからないと大人とはいえないんじゃない。。？

なんて考えちゃったりして。

今 考えるとなんだか おかしいけど。

初めて、
これが彼氏ってやつか？と
思える人ができたのは
中学生のとき。

絵とギターがともうまくて明るい、
でもなんだか影のある人だった。

私は映画好きの母に
いろおおおおんな映画を観せられたせいで
気分は大人な中学生だった。

「ブリキの太鼓」は小学校3年生のときに観た。
気分が悪くなった私をかわいそうと思ったのか
帰りにファミレスでパフェを食べさせてくれた。
さすがにおいしくなかった。

だって「ブリキの太鼓」だよ??

これが「文芸作品」とかいうやつ???
パフェがおいしくない
ということが悲しかった。

さらに

おいしくないことを母にいけない自分が
もつと悲しかった。

3年後「ブリキの太鼓」の原作を読んだ。
原作はなんだかわからないなりに
おもしろく思えてほつとした。

そんな(?) いろんな映画たちのおかげで
なんというか
いじめっ子や意地悪な子がいても

まったく気にならず

先生にいやがらせされても

しょうもない人だなあ、と思うくらいですんだ。

映画を観ているうちに

人間は心の中に

自由な世界をいくらでも作ってオツケー

と思うようになっていて

誰も壊せない自分の世界を幼いころから
持つことができた。

中学生の彼もそんな世界を持っていた。
なんだか

「この人は掘るときつとおもしろい」

そう思わせる雰囲気があった。

外見がふけているワケでもないのに

妙な落ち着きと微妙な暗さと

話すことや好みが妙に大人っぽいので

「おっさん」と呼ばれていた。

大声で笑ってるのに静かな感じがする人だった。

私の住んでいた開発して間もない住宅街から

少し離れた町に

彼は母親と弟と3人で住んでいた。

そのころは気づかなかったけど

お母さんは水商売だったんだと思う。

畑に囲まれた小さな一戸建てに遊びにいくと

たくさんおやつを出してくれて

夕方の5時ころになると

「行ってきます。」と出て行った。

あつかるいお母さんだった。

私のことを子供扱いしなかった。

お化粧が古い日本の映画の女優さんみたいだった。

たばこを吸う大人の女の人を始めて身近に見て

幸せいっぱいじゃないんだな、と思った。

彼と同じで

明るいけど　なんだか影のある人だった。

彼はいつも自分とちつとも似てない

10歳近く年が離れた弟をとてかわいがっていた。

ワイルド7（セブン）　と　ベンチャーズ。

私たちの世代で知っている人はまずいない

このマンガとアーティストが彼のお気に入り

ワイルド7の絵を真似て描くことも

ベンチャーズをギターで弾くことも

おどろくほど上手だった。

彼のお父さんの存在は

このマンガとアーティストから感じた。

当時は受験戦争全盛期。

みんな偏差値で右往左往しながら

自分の夢と偏差値の折り合いをどうつけければよいのか

必死で悩んだりしていた。

私の母も私の受験でアタマがいっぱいだった。

成績の上がない私は

母の夢と私の成績の折り合いをつけるには

どうしたらいいのかわからなくて

だんだん夕飯の時間がいやになってきた頃だった。

でも彼は成績が悪くても

まったく気にせず、のんびりしていた。
だから彼と遊んでいる時間は
私ものんびり楽しかった。

彼は成績こそ悪かったけれど
彼の話はいつもおもしろくて
いろんなことを知っていて
わからないことがあると

上手に説明してくれた。

「成績はなくても生きていける。」
って言える彼がうらやましかった。
彼は私より

「生きる」ってどういうことか知っていたような気がする。
悲しみもよろこびも大人のことも
私よりずっと知っていた。

この恋は私の引越しで終わる。
引越して1年近くたった頃
高校2年になるうかというときに
彼から手紙がきた。

二人でよく聴いた
井上陽水の「傘がない」の詩が入っていた。
ときどきした。

「君の街に行かなくちゃ。傘がない。」
詩以外に何のコトバもなかった。

うれしかった。

だけどとまどった。

私にとっては過去のことだった。

小さい頃からいやなことがあんまり多いから
見切りが早くあきらめるのが早い性格になっていた。
失望して傷つくのがきらいだった。
今でもちよつとそうかも。

携帯電話もない時代。

直筆の便箋1枚の手紙は私の手に重かった。
表書きを見て気がついた。

切手がない！！

消印もない！

自分で届けたんだ！ウチまで来たんだ！

彼の家から私の家まで

電車で3時間近くかかるのに。

翌日 迷った末に彼に電話をした。

「久しぶり。」

高校生はドラマみたいにうまく会話なんかできない。

「手紙見た？」彼は明るくきいてきた。

「うん。ありがとう。」

「家まで行っちゃった。へへへ。おどろいた？

ヒマだったからさ。ウエっちと二人でさ。」

「そうなんだ。びっくりした。」

何も言えない。

私にはわからなかった。

こんなに離れてるのに、これからどうしたらいいんだろう。

私はわからなかった。

やさしくするのはなんだか偽善に思えた。

彼は明るく

「元気でね。」と言った。

それにつられて

「うん。そっちもね。ありがとね。」

終わったと思っていた恋が

ぶわっと復活して

また終わった。

部屋に戻って

彼からもらった絵とかマンガとか音楽とか字とか見て

大きな箱にしまって

フタに幾重にもテープして棚の奥にしまった。

こういうとき

少女マンガだとベットに伏して泣いたりするけど私は普通に家族と夕飯を食べた。

数年後

大学をなんとか卒業して

デパートに勤めた。

景気が上り調子のころで

毎日夜中まで売り場で働いていた。

入社した年のゴールデンウィークだったと思う。

レジの中で商品の包装に追われていた。

「よっ。」

明るくて静かでやさしくてすっかりした

彼の声のはつきりと聞こえた。

手元の包装紙から目をあげるとすぐそこに

彼がいた。

息がとまった。

「なんで？なんで？え？え？」

「またウエツちとかと遊びにきてさ。

ここで働いてるってきいたからさ。

元気そうじゃん。」

「元気。元気だけど。。。。」

私はどんな力才をしていただろう。

仕事を離れられる状況じゃなかった。

お昼も食べれないほど忙しかった。

「またね。元気でよかったよ。」

彼と数人の同級生が手を振って去っていった。

包装紙に涙が落ちるかと思った。

それきり。

それ以来会ってない。

それからたくさん時間が過ぎて

たくさんを経験して

今思うことは

当時

「今の私の恋なんて長い人生の中で小さいこと」

と決め付けて

未来にばかり気をとられて

すぐ近くにいた

やさしくて深い彼の心を

はねのけてしまった

おろかな自分のこと。

弱い、臆病な自分のこと。

なんてなんて素敵な人だったんだろう。

もっともっと話せばよかった。

もっともっと会えばよかった。

ありがとうって

もっと言えばよかった。

私のことを

ずっと何も言わないで

想っててくれたやさしさを

うけとめられずに

逃げてしまった

私の若い恋のこと。

あばれんぼう

なんで暴れてばかりいるんだろう。
いったい何のトクがあるんだろう。

小学校で目立っていた暴れん坊のKは
毎日のように

教室の備品を壊しまくっていた。

当然、女子からも敬遠されて

Kがやってくると

みな 大事なものをかばんに隠した。

中学生になった。

廊下でうしろからいきなりKの声がした。

「おまえさあ、ブラジャーしたほうがいいよ。」

どこでも不良は

まわりよりマせている。

その日私は母にやつあたりした。

映画好きの母は

クラシック好きでもあった。

田舎に住んでいたのに

たまに市のホールに外国の室内楽などが来ると
必ず私を連れていった。

小学校4年生のときにイ・ムジチがきた。

会場で

Kと母親を見た。

蝶ネクタイとブレザーのKに驚いた。

以外なことにKはバイオリンを習っていたらしい。

Kは小学校の後半から中学の途中まで父の仕事の都合で外国で暮らしていた。不良の雰囲気は変わらなかったがなんとなく

洗練されて帰ってきた。

女の子の扱いもうまくなっていた。

が、私にとっては

「廊下でブラジャーをすすめた

イヤなヤツ」

のままだった。

大学に入ると

それまで女子高で3年間

まじめにやってきた反動と

バブルのムードがばっちり合致して

私はやりたい放題。

当時の女子大生は

時給のいいバイトには困らなかった。

私はすっかり遊び人になった。

お母さん、ごめんなさい。

中学のころにやって

楽しかったバンドを

またやろうと思って

バンドサークルに入った。

小さな部室ではいつも

聴いたことのない

ブルースやロックやジャズを
ギターやピアノで奏でる先輩がいて
何時間いても飽きなかった。
授業はそっちのけで通いまくった。
ライブハウスで楽しい音楽を
聴くのはなによりも幸せだった。

大学の部室から

JRの駅まで歩くと20分ちよつと。
ずっと店が続くなかなか楽しい道のりだ。
まんなかあたりに

1階の壁に大きな青りんごの絵が描かれている
ちいさな白いビルがあった。

青りんごの右に緑色のドアがあり
5時をすぎると開け放されていて
ちよつとのぞくと地下へのちいさな階段があつて
通るたびになんとなく目がいく。

梅雨の終わり頃のさわやかな夜、
サークルの女友達と

その店の前まできたら

開け放した緑のドアから

なんとも楽しそうな

笑い声が聴こえてきた。

「地下」で「様子が見えない」ので
入るのをためらっていたが

その夜はなんだか許されるような気がして
二人で恐る恐る階段を下つていった。

小さな小さな店だ。

カウンターは7席くらい。

4つのテーブルのうち2つに
ギターをかかえた

外国人がブルースをやった。

「うわーお！うまい！」
心の中で叫んだ。

ハンプティダンプティのようなおじさんが
カウンターの内で

うまそうにパイプを吸っていた。
オレンジのTシャツが
妙にさわやかでおかしかった。

「お！いらつしやい！
2人？どうぞどうぞ」

予想に反して

囃家みたいな軽快なしゃべり。

「へー。女の子2人は珍しいね！何にする？」

「。。。ジンライム。。。2つください。」

のんべ女子大生である。

カウンターは居心地がよかった。

音もよかった。

外国人のギターも歌も

店の真空管アンプも。

ハンプティダンプティの選ぶ
ジャズのレコードも。

お客さんもよかった。
半分はスーツだった。みんな男。

なんだかわくわくした。

「あのさあ、どっちかウチでバイトしない？」

唐突に

ハンプティダンプティが言う。

「私はむり。他やってるし。」友達が言う。

「私やります！ジャズきたいし！」

思わず手をあげて言った。

「じゃさ、月曜日の4時すぎくらいにきてね。」

私たちのことを

とくに詮索しないで

バイトに誘うのが驚きだったが

ここにいれば

おもしろい人に会えそうだと

直感した。

高校までほぼ「無菌」な環境だった私は
人間に対する好奇心いっぱいだった。

大学1年の夏休みに

私は前に住んでいた町に
遊びに行った。

まだ友達が何人も住んでいて

泊めてもらった。

おさななじみとの再開は

想像以上に楽しく、何時間も一緒にいた。

夜中に近所をみんなで散歩した。
後ろから声がした。

「いいオシリしてるじゃん。」

はあ？

振り向いた。

Kだ。

いつから合流していたんだろう。

私は無視した。相変わらずなんてヤツ。

でもなんだか ちよつとうれしかった。

戻ってきて3日目に

電話がきた。

「Kだけど。どっかで飲もうよ。」

外国にいたときの話がおもしろそうだったので
ハンプティダンプティの店で会うことにした。

「だけど今日はそこでバイトだから

10時頃終わるからそれからちよつと飲むってカンジでいいい？」

「いいよ。カウンターから話せるし。早めにいくよ。」

下心だらけなんだろうなー、とあきらめつつ

「おっけー。」

バイトは6時から。店は6時半から。

そして6時45分。

階段をおりてくる足音。

なんとスーツを着たKだ！

あの暴れん坊がスーツ！！！！

心の中で大笑い。

Kにしてみれば

ジャズの流れるカウンターバーなんて
背伸びするべき大人の空間に思えたんだろう。
こっちはＴシャツにジーンズなのに。
でも

私にあうために

きちんとした格好をしてくれたことが
とてもうれしくなった。

「かつこいいじゃん！似合ってるよ。
とりあえずバドでいい？」

Kは心底ほっとした、という力才をした。

Kは私の守備位置の正面の席に座った。

それにしてもまだ7時前。

私があがるまで3時間はいないだろうなあ。まったく。笑。

その日は結構混雑して

やっぱり仕事中は落ち着いて話せなかった。

暴れん坊のKは隣に座った常連と話したり
ハンプティダンプティとお酒談義をしたり
ゆっくりロックを飲んだり

予想以上に楽しそうに過ごしていた。

外国で習ったのかい？とからかいたかったけど
我慢した。

「彼も待ってるし、もうあがんなよ。なんか店空いてきちゃったし。」

9時すぎにハンプティダンプティがあがらせてくれた。

一緒に一杯つつ飲んで

ハンプティダンプティにお礼を言って店を出た。

「よく長い時間いたねえー！」

私は素直に驚いてそう言った。

「話したかったからね。」

私以上に素直な返事にこまってしまった。

ほめられたり好かれたりするの慣れてない。

今夜だって

ちよつとしゃべって一晩とまって

バイバイ

くらいの気でいた。

最低だけど。とにかくその頃はそんな日々だった。

Kのいた国はラテン系で

何もかも日本と違う暮らしの話は

とてもおもしろかった。

最初はコトバで苦労したけど

暴れん坊にはぴったりの風土で

とても楽しかったようだ。

帰国子女として坊ちゃん高校に入り

高校生のころから

六本木で遊びまくっていったそうだ。

なるほどね。

そろそろ終電だ。

「新宿に12時に着かないとまずいからさ。」

私は席を立った。

「じゃあ、新宿まで送るよ。」

「へ？いいよー。子供じゃあるまいし。」

なんだかめんどくさくなつて

私は言った。

「じゃ、このままKの部屋にいこうよ。」

Kのアパートはすぐ近くだった。

最低だけど。とにかくその頃はそんな日々だった。

Kは最初困った力才をしたけど

「何もしないから大丈夫だからな。」と了解した。
2人とも

もつと話したいなあという気持ちは一緒だった。

Kの部屋でコーラを飲みながら

夜中の2時くらいまでしゃべった。

「あー、疲れた。寝よ。」私は床に
寝っころがった。

Kは私にタオルケットをかけて

自分は台所のほうの床に寝た。

3分くらい経っただろうか？

「しないの？」私はたずねた。

して(されて)当然、と思っていた。

男の子からおもしろい話を引きずり出すには
この行為がついてくる。と思っていた。

ものすごく予想外の答えが返ってきた。

「大事にしたいから、しないんだ。」

「へ？」

「よくないから。そんなんじゃないから。

ちゃんと彼女にしたいから。

したいけど、しないんだ。」

何も答えられなかった。

自分のことをとても汚く思った。

私は「愛」とかわかんない人間なんだ。

その時に実感した。

Kは私をがっちりと束縛した。
自分以外の男と2人で会うことは許さなかった。
男の子とのかけひきみたいな
付き合いに疲れかけてた私は
楽になった。

Kの言うことをきいていればいい。
守ってもらえる。大切にしてくれる。
いつか結婚しようということになった。

Kは外国から帰ったあと
ろくに勉強をしなかったらしく
2浪していた。

私は先に社会人になり
Kのアパートの近くに
自分もアパートを借りた。

半同棲がはじまった。
学生結婚した母に

「結婚する前にしばらく一緒に暮らして見なさい。」
と言われたときはびっくりした。
まじめな母が同棲を公認するとは！

私は夢中で働き

Kは相変わらず大学生だった。
働きながらも家事をやらなきや
と、かなりがんばった。

KもKなりにいろいろがんばった。

残業で疲れた日だったが
最近外食が続いているので
無理をして夕飯を作った。

Kは連絡もせずバイト仲間と飲んで
夜中に帰ってきた。

私は何も言わず

お皿の中身をゴミ箱に投げ捨てた。

Kには仕事のグチを言わないようにした。

そのかわりKのグチをきく余裕もなくなっていた。

Kも就職した。

2人とも忙しくて休みの日は疲れて寝ていた。
会社の人とばかりしゃべってる。

Kとたくさん話したのはいつだっただろう。

Kも疲れてる。

でも私もとても疲れているから

Kをかまう余力がない。

誰か助けてほしい。

疲れた気持ちを救ってほしい。

疲れて帰って 部屋にKがいると
ため息が出そうになった。

クリスマスが近づいた冬の日

私の仕事場にふらっとやってきた
学生時代の仲間の一人と

私は寝た。

それから何日かたった。

残業を終えて遅い時間に部屋に帰ると
Kが

電気もつけずに座っていた。
泣いていた。

「なんでしたんだ？」

「。。。。わからない。しんどかった。」

私は逃げたかった。

自分は逃げたかったのに

出て行こうとするKを必死で止めた。

玄関にイスを積み上げて

道をふさいだ。

泣きながら興奮して動いているのに

アタマの隅はなんだか冷めていて

「ドラマみたい」思っていた。

一人になるのは耐えられなかった。

最低だ。自分勝手。だけど

どうしてもKと話したかった。

Kは出て行った。

私は朝までベッドにすわり

雑誌をこまかくちぎって過ごした。

それから1年後

Kは会社の人と結婚した。

その1年後

中学時代にKとも私とも仲が良かった

太郎から電話がきた。

「最近Kと会った？」

「へ？会うわけないじゃん。太郎ちゃん元気だった？」

「今からさ、言うけどさ、驚かないでくれよ。」

「なに。。やなこと？Kどうかしたの？」

暴れん坊のKのカオがいきなり脳を占拠した。

「まさか、死んじゃったのっ？」

「違うよ！」

「じゃ、事故とかで。。。腕がなくなったとか？」

「違うよー。こえーなあ。」

「なによ！」

「。。。。。。 婦女暴行だよ。」

「。。。。。。 え？」

腕がとれたのではなくてよかった。瞬間そう思った。

「団地でさ、会社の帰りにさ、女の人つけてさ、やっちゃったんだって。」

ケーサツ、お前のことも知ってたぞ。オレにききにきた。しかもさ、シラフだったから 余計に罪が重くなるって。ワイドショーでカオが出ちゃったってさ。」

「。。。。。。 そう。そっか。そうなんだ。」

奥さんはどうしてるんだろう。

詳しい人にきいたら

3年くらいで出てくるよ、と言われた

暴れん坊のKとの
不器用な恋の話。

サトルコ

大学時代から就職3年目まで
一人暮らししていたアパートのそばに
美容院があつた。

サトルコはその美容師。
ほんとは「さとり」。
心が女性だから「サトルコ」。

初めてその美容院にいったときに
私を担当したのがサトルコだった。
私は美容院が大の苦手。
緊張するし気は使出し
とても疲れるのだった。

「だいぶお疲れね。」
「今朝まで飲んでたから。すみません。」
「あらやだ、あやまつたりしないでね。
大丈夫。疲れもとってあげるから。」
本当だった。

電車や街中で他人にふれるのさえ苦手な私が
サトルコの手には拒否反応をしめさなかった。
気持ちがいい。
お母さんの手ってこんな感じだったんだろうか。
もうそんな感覚、忘れていた。

「はい。会員カードはこちら。
あんまり夜遊びしちゃだめよ。」
美容院を出ると

雨があがつたばかりで
いつも薄汚れて見える商店街も
日が差して清潔に光っていた。
気分はすっきり軽くなっていた。
こんなの久しぶりだ。

それから
いやなことがあったり
体調がいまいちだったりすると
サトルコのところに通うようになった。

「あなたねえ、
そんなに遊んでばかりで卒業できるの？」

「卒業は必ずするよ。親にお金出してもらってるから。」

「卒業の前に体壊すんじゃない？」

正直、そのころは
Kと別れてから
自分が何のために
毎日息をして生きているのか
さっぱりわからなくなっていた。

なんだか懸命に
働いてばかりいた。
稼いだお金で
できるだけいろんな人間に
会おうとしていた。
男の人たちとも
相変わらず遊んでいた。
軽い付き合いは
悲しい気持ちを

ちょうど良くほぐしてくれたけど
無意味だった。

「こんなんじゃないかん！とは思ってるんだけどさ。」

「いいわねえ。まったく！」

「サトルコはさ、美容師楽しい？」

「こんな楽しい仕事ないわよー。」

自分の手で人様をきれいにできるんだから。」

「私ね、小さい頃からそういうのないんだよね。」

何かになりたい、とかさ。ないから大学いったの。

でさ、就職もさ、なんとなくさ。」

本当だった。

夢を持ちなさい と言われ続けたけど

どうやったら持てるのかわからなかった。

成績が悪い子は夢の前に成績を上げないと

何もできないと思い込んでいて

そのままこんな年までできてしまった。

サトルコは何人が友達を紹介してくれた。

みんな心は女性だった。

やさしくて、やさしかった。

私が今まで知らなかった

大きくて広いやさしさだった。

「もったいないわねえ。女に生まれて手入れしないなんて。」

「化粧も適当ねえ、まったく！」

「くわえタバコだめっ！！吸うなら輸入物にきなさいっ！！」

しかりながら

いろんなことを教えてくれた。

男の気持ちにも

女の気持ちにも

人間の暗い部分にも詳しくかった。

「最近、いい感じだねえ。大人になってきたかな？」

サトルコたちと遊ぶようになってからしばらくして

バイト先のバーのハンプティダンプティみたいなマスターに
ほめられた。

週に1度だけだったけど

就職してからも気晴らしに手伝っていた。

そういえば

バーでお客さんと話すのも楽しめるようになっていた。

サトルコたちのおかげで

知らないうちに

聞き上手になっていた。

持ち場のカウンターの前に座ったお客と

グラスを洗ったり

ピザにのせる野菜を切ったり

氷を出したりしながら

おしゃべりするだけだけど。

彼らの目的は

マスターのレコードコレクションを聴くこと。

自分のお店が終わってからやってくる人も多かった。

相手がどんな人か

どんな人生でどんな悩みがあつて

どんな気持ちでこの店に来たか

想像してもてなすのがとても楽しかった。

さらに お客 と 従業員 という立場が

前提のやりとり、というのが楽しかった。

なにか相談されても

あんまり親身になつてはいけないし、相手もそれはわかつている。

「水商売向いてるねえ。」

よく言われた。自分でもそう思った。

天涯孤独だったら

とつくにお店をやつてゐるような気がする。

まあ、そんなに甘いものじゃないけど

魅力的な仕事だとずっと思っていた。

「ネグって何でも 広く、浅く、よね。」

人ときあうときも、何か考えるときも。」

サトルコは髪の毛のネグセも直さずに美容院にやってくる私を「ネグ」と呼んでいた。

「広く、浅く。。。軽く、かもね。」

「やあねえー、若いのに。もつとなんでも つつこみなさいよ。成長しないわよ。」

つつこんで何かあったとき耐える体力が

私の心には残つてなかった。

いったい何に使つてしまったんだろう。

いつからこんなにカラカラになっちゃったんだろう。

今は大キライな人もいない。平和だ。

でも大好きな人もいなかった。

毎日を淡々と消化して誰にも迷惑はかけてない。

そつなく生きてる。いいことじゃないか。

けど、

いつもシャツの背中が破れて

スーシューとつめたい風が通つてゐる気がした。

寒いときは自分の腕で自分を抱きしめるしかなかった。

サトルコのブローがやさしくて、あったかくて

泣けてきた。

「ちよつとっ！お店で泣かないでよー！！」

営業妨害じゃない！」

私は泣きながら笑って言った。

「もうちよつと前髪切っちゃって。」

「はいはい。お嬢様。」

「ネグは男がいないとだめなのよ。

独りはムリなタイプ。なのに

自分から好きにならないのよ。」

夜になって心配したサトルコが

電話をかけてきた。

「しかも、しかもよ？」

もがくのもキライ。失敗するのもきらいでしょ？。」

もつと言って。もつともつと。

「自分のことをさらけ出せない人はね、

人からも見せてみられないのよ。」

きいてんの？」

「。。。うん。きいてる。」

「人間つてのはかつこ悪いもんなのよ！

なんでも下手なのよ。みんなさびしいのよ。

寂しい寂しいってね、泣いてさ、おこつてさ、

ドジって後悔して 転んで 泥んこで生きてくもんなのよ。」

「うん。」

「ネグは1度転んだのよ。大失敗よ。」

Kのことだと思った。

「その大失敗をさ、

あんたったら金庫に入れてぐるぐるに鎖巻いて湖に沈めたのよ。
だから心がからっぽになっちまってんのよ。」

「。。。。。。うん。。。タバコ吸っていい？」

泣きながら火をつけた。

深く吸ってからきいた。

「あたしさ、なんかさ。。。楽になりたい。

なんかね。。。毎日ね。。。しんどいよ。

平気なんだけどね、普通に暮らせるんだけどね、しんどくてね。

でもこんなこと人に言っただけで、言われたほうも困っちゃうでしょ？でもさ、もうさ、

なんか。。。どうしたら楽になれるかなあ。」

こんなふうに誰かに訴えたのは生まれて初めてだった。しやくりあげる私を 数分ほっというてから

サトルコは静かに言った。

「。。。金庫の中身を受け入れるのよ。

中身をよく見てプラスもマイナスも

人生の通帳にちゃんと記帳しとくのよ。それだけよ。」

「。。。便利だね、その通帳。」

「でもね、便利だけど一生捨てられないのよ。

捨てちゃだめなのよ。書き換えもできないのよ。」

サトルコの声がいっつもより男っぽかった。

「。。。ほんとだ。。。私、男がいないとだめなんだ。くくく。」

「ばーか！また髪きりにいらっしやいね。待ってるわよ！」

小さなベランダに出て外の空気を思い切り吸った。

星。。。出てない。月もない。

近くの幹線道路の車の音が

ぼやけたかんじで響いてくる。

小さなグラスにウオッカを注いで

何も無い空に乾杯した。のどがやけた。

「ほんとにいいのね？オツケーよね？」

「はい。思いっきりいつちやってください。」

サトルコにベリーショートにしてもらった。

だって私は大失恋したんだから。

「うわー、すごい！男みたーい！」

でもなんだか

小さい頃のおかつぱだった自分に戻れそう
うれしかった。

「サトルコ、電話、ありがとね。」

「。。。まあね。」

「お礼はどうすればいい？」

「そうねー、若くていい男、紹介してもらおうかしらね。」

友達以上の友達に教えてもらった
生き方の話。

スケッチ

学生時代から結婚するまで
ほぼ毎年

独りでアメリカに行った。

なぜアメリカかと聞かれても
たいいした理由はない。

東京でなくて

日本でなくて

思い切り時差があるところ。

でも今回は理由があつた。

先月Kと別れてから続いた

荒れた生活から離れたかつた。

離陸の瞬間が好きだ。

特に社会人になってからは。

1週間から10日くらいの休みを作るために
休暇の前はしゃかりきになって

仕事をこなした。

ボロボロになって

そのへんの温泉にでもいくような
適当な中身の小さな荷物と

飛行機に乗り込む。

「よし。敵もここまでは追ってこまい。」
そんな気分になる。

「敵」はそのときで
いろいろだが

自分以外のすべて
だっただかも知れない。

飛行機が宙に浮きあがると
心からほっとして
枕2個と毛布をもらって
ひとつを腰とシートの間に
ひとつをおなかとシートベルトにはさみ
アタマから毛布をかぶり
気を失うように眠ってしまう。
たまに食事に起きることもあったが
ほとんどは
着陸の衝撃で目が覚める。
なぜかノースウエストの時だけは
衝撃が感じられなくて
出口に向かう人たちのざわめきで
目覚めた。

通路に出口へ向かう人の列が
ずーっと続いている。

私はのんびり
列が流れるのを眺める。
いろんな人が
まだ見えない目的地を見つめて
静かに急いでいる。

もう最後かな
という頃に立ち上がり
のんびりと飛行機が出る。

ここからは
だらだらしていると
やられてしまうので
緊張せざるを得ない。

値段を確認して

街までのタクシーにのりこむ。

運転席の背面の

分厚いアクリルと

（割れたところは灰色のテープで
頑丈に補強されている）

ドライバーの

太くて黒い首に光る

重たそうなチェーンのネックレスが
私をさらに緊張させる。

が

まるでここに住んでるのよ

みたいな力才をして

景色を眺める。

女優気分である。

15分くらい走ったところ

「音楽をかけていいか？」

ドライバーがきいてきた。

「趣味のイヤツにしてくね。」

と答えると

「何だよ！英語わかるのかよ！」

みたいなことを

うれしそうにまくしたててきた。

一人旅の安全を守るには
ある程度の言葉の習得は
かせない。

ボブ・マーレイだ。
いいじゃん。

今回も

学生時代から来ている宿にした。
一週間単位で安く泊まれる。

J・F・ケネディという

ふざけた名前の

マネージャーがいて

ずーっと住んでる人も多い。

日本人の学生もいた。

建物は古いが

清潔にリフォームしてあつて

ベッドも大きく

毎日ちゃんと掃除してくれる。

ただ、

その裏通りは

ちよつと危ない

ストリートだ。

よく夜中に

「S O M E B O D Y ! ! ! ! ! ! ! ! ! !」

と助けを呼ぶ声が聞こえた。

もちろん死にたくないから

目をぎゅつとつぶるだけ。

いつものお気に入りの部屋に
落ち着きほつとする。

この宿にチェックインしたら
旅の目的の半分以上は達成してる。
ベッドに仰向けになる。

白い壁。

大きな木のドア。

白い窓枠に区切られた

真っ青な空。

真っ白な雲。

乾いた空気。

廊下から聞こえる

英語。

気持ちいい。

なんて気持ちがいいんだろう。

ここまで離れないと

心が開放されない私は

病んでるんだろうな。

と思う。

それはKと付き合う前から

変わらない。

今年は

何人の友人が

この宿に残ってるんだろうか。

ラウンジに降りてみる。

コーヒーと紅茶は24時間飲み放題だ。

朝と夜もここで食べられる。

玄関もラウンジも見渡せるカウンターには
いつもJ・F・ケネディーがいて

みんなを和ませる。

彼は」と呼ばれている。

「リタ、ひさしぶりだねえ。」

」が勝手に私のことを「リタ」と呼ぶので
ここでは「リタ」が私の名前だ。

なんで「リタ」なんじゃ。

最初は恥ずかしかったが
もう慣れた。

「紅茶もらうね。」

午後の4時。

学生は学校。

仕事がある人は仕事中の時間だ。
静かだ。

食堂の入り口に見えるソファでは
ピンクのカーディガンをはおった
金髪の老婦人が新聞を読んでいる。

キャシーだ。

キャシーは細身だけど

毎朝ドーナツを6個と

砂糖とミルクたっぷりのコーヒーを3杯
食べる。

昔は教師をしていたらしいが

事故を起こしたかなにか

トラブルがあつて地元にいずらくなり

この街に来たらしい。

何十年も前に。

とりあえず英語をもうちよっと思ひ出さないと
思つて

キャシーとおしゃべりした。

教師だっただけあって
キャシーの英語はきれいで
わかりやすく
正しい発音も教えてくれる。
1時間くらいしゃべっていたら
知った顔が何人もラウンジに集まりだしたので
「キャシー、あとでね。」
とラウンジに戻ろうとしたら
「リタ、悪いことはダメよ。」
と言われた。

「悪いこと」。
この宿は

MBAを目指す学生から
ホームレス寸前の荒れてる人まで
自由に暮らしている。

日常の中でカンタンに

「悪いこと」ができる環境だ。

私はこの宿で「自由」の厳しさを知った。
自分を守るのは自分。

一緒にお茶を飲んでるこの仲間の中で

一人はあやしいクスリを運ぶバイトをしている。

一人はチャイナタウンで傷だらけになつて倒れていたし

一人はスーツの数人に突然連れ出されたりしてたし

今は笑ってしゃべってるただけだけど

かなりアブナイ人生の人も多い。

そして普通にそういうことに誘われる。

はつきり断れば大丈夫だけど。

私はそういうことはしない、と宣言してあるので
そういう「悪いこと」をするときは

「リタはあっちにいったな。」と追いやられる。
そして次の日
何もなかったように挨拶する。

ここにいる間は

なんだか映画の中にいるように感じる。

へたくそな英語を使っているせいなのか
それとも一人旅の緊張か

あるいは旅先だという気楽さなのか、

アタマの中も性格も

日本にいますときより

はつきりとテキパキしている。

こんな風な自分も結構好きだ。

メソメソしても

誰も気にしないよ。

そんな空気が気持ちいい。

私って

冷たい人間なのかもしれない。

旅行中に寂しくなったり

静かにすごしたくなると

一人が当たり前の場所、

美術館に行く。

静かで空気がきれいで

街中よりは安全で

何時間でもいられて

トイレもきれい。

カフェもおいしい。

私は

イタリアの古い肖像画が好きで

背もたれのない大きなソファに腰掛けて
ずーっと眺めていられる。

よく知らないが

絵の人物が持っている

本や道具などが

帽子や洋服などが

その人の職業を表しているらしい。

レースやシルクやビロードや毛皮やシフォンを

木や紙や金属を

筆で描きわけなんて。

この人はこの変な形のヒゲを

どうやって洗ってるのかなあ。

この本は汚れているけど

辞書なのかな。専門書なのかな。

どうしてこんなおっさんが

こんなにきれいなレースの襟を

つけてるんだろう。

時間が止まる。

たまに警備員交代のおしゃべりが

きこえる。

「この絵が好き？」

突然英語で話しかけられて驚いた。

そうだ。

日本じゃなかったっけ。

緑の目に金髪。

Tシャツにジーンズ。

大きなザック。

歩き倒したブーツ。

の男。

無視するべきだけど。

その日はさびしかった。

「。。。。この部屋が好きなの。」

深紅の壁紙の

肖像画しかない部屋。

いかんいかん。

背筋をのばして立ち上がり

その部屋を出た。

宿に戻ると

ソファでキャシーが編み物をしている。

今日のカーディガンは

薄い藤色だ。金髪に良く似合う。

「キャシー、今日ね、美術館で

キャシーみたいにきれいな金髪の男の子に

会ったよ。」

「リタ、遅かったのね。夕飯にまだ間に合うかしら。」

「キャシーはもう済ませたんでしょう？」

私、サンドイッチ買ってきたから部屋で食べる。」

「私の部屋にいらっしやい。おいしいココアがあるのよ。」

「ウチの紅茶もおいしいよ、リタ。」

電話くれれば夕飯とっておいたのに。」

カウンターのJが口をはさんだ。

夕飯は8時までには食堂に来ないとありつけない。

「ありがと、J。うっかりしててさ。」

英語って

会話に

「ありがと」「ってつけることが多くて好きだ。」

「それで、その男の子と話したの？」

ココアを私に差し出しながら

キャシーは目を輝かせてきいてきた。

「まさか。危ないじゃない。」

「あら。そうなの。そうね、そうよね。」

日本人の女はすぐひっかかる

という風評のせいだ

私は必要以上に警戒していなければ
ならないのだ。

「ほんとさ、話したかったんだけどさ。」

「美術館で会おうなんて素敵ねえ！」

キャシーの中では

勝手に物語が始まっているみたいだ。

「キャシーは今、好きな人いないの？」

「ふふふ。いたのは昔。昔々よ。」

リタはどうなの？」

「いたんだけど。私が浮気して

こないだ別れちゃったの。

それから遊びまくってる。

でも寂しくってさ。

だからここに来たのかも。」

英語だと語彙が乏しい分

何でも素直に言える。

「よく来たわね、リタ。」

行動するのは良いことよ。」

キャシーは何も聞かずに

軽く背中をなでてくれた。

涙がぱたつと落ちた。

メソメソしてたらダメなのに。
でも泣いた。

泣いちゃったよ。

そういえば

別れてからしばらく

泣いたり怒ったりしてなかったなあ。

ちよっと泣いたら

ちよっと心が軽くなった。

「さ、泣き終わったら食べなさい。」

「えー、こんな悲しいのに食べるのー??」

「悲しいのに食べなかったら

もっと悲しくなるでしょう?」

キャシー先生は厳しかった。

「食べたらあたたかくして寝なさい。」

「。。。。はい。」

何年かぶりに生徒扱いされて

甘い気持ちになった。

「リタ、あなたの人生は

はじまったばかりなのよ。」

こんなセリフ

日本では女優にでもならない限り

きけないかも。

素直にうなずいた。

その夜はいつもより早くベッドに入り
よく眠った。

2日後

また美術館に行った。

入り口の前は大きな大理石の階段で

みんな思い思いの場所に座って

パソコンしたり

キスしたり

キャッチボールしたり

寝たり

食べたり

読んだり

論じたり

大道芸の練習をしたり

それを見て楽しんだり

ワゴンのソーダを買って飲んだり

電話したりしてる。

私は

持ってきた小さめのスケッチブックを開いて
絵を描いた。

人や風景じゃなくて

心にうかんだものを描いた。

ハート。

そのハートの真ん中にヒビを描く。

ハートを青く塗りたくなった。

ミュージアムショップで

小さな色鉛筆のセットを買って

青く塗った。

そっか。

今の私、やっぱり結構しんどいんだ。

納得した。

このハート

どうしたら

あたためることができるんだろう。

はああ。

あたしってかわいそう。

なんだかおかしくなってきた。

「ヒビがはいつても

ハートは赤く塗らなきゃ！」

後ろから声がした。

緑目の金髪。肖像画部屋の彼だ。

なんだかいろいろ警戒するのが
急にばからしくなった。

日本で遊びまくってるくせに

ここで格好つけてどーするよ。

「このくらい冷えてるってことよ。」

「おおおお寒い！凍えそう！」

「ほっというてよ。」

私はスケッチブックを閉じて

公園へ向かって歩き出した。

「一緒に歩いていい？」

「いいよ。暇なのね。」

「S大って知ってる？日本の。」

僕はあそこに3年いたんだ。」

S大！わが母校。

「ふーん。じゃ、日本語わかるんだ。」

「ハイ。ワカリマス。ヘタデスガ。」

いきなり日本語だ。

「ソウデスカ。ワタシハ エイゴガヘタデス。」

へんな会話。

ヘタな日本語とヘタな英語で盛り上がった。

気がつくと

公園のベンチでは寒く感じる時間になっていた。

「リタ、キスしよう。」

「今度ね。」

笑いあったまま 明るく別れた。

「また彼に会えたのね。よかったわ。」

キャシーが物語の続きをきいて喜んだ。

「でも、キャシー、これって

悪いこと ではないのかなあ。」

「悪いことにするかどうかはリタ次第でしょう?。」

「。。。ふーん。」

じゃあ、セックスはしないことにする。」

「リタの思うとおりになさい。ただし

何事も丁寧を考えるのよ。

丁寧を考えれば失敗しても

パニックにはならないわ。」

日本人の私がわかるように

カンタンな単語を選んでくれる。

あつという間に

明日帰る、という日になった。

散歩に出た。

やっぱり足は

美術館の方に向いた。

会えるわけない。

会えないのに。

肖像画を眺めても

なんの想像もできない。

「だめだな、あたしって。」

悲しいときは食べるという

キャシーのコトバを思い出して

美術館の中のカフェに行った。

明るい日が差す中庭がきれいだ。

かわった彫像があつて
スケッチしている人がいる。
大きなザツク。

金髪。

まさか。まさかね。

中庭を囲むようにある
カフェのガラスの壁を一周する。

彼だ。

一生懸命

スケッチしている。

私は彼の死角になる席に移り
スケッチを眺めた。

うまい。

そつか。美術の勉強もしてるのかもな。

そつかそつか。がんばってね。

そんな彼を見ただけで

なんだか満足した気分になった。

もう帰ろう、と席を立ったとき

彼がふつと視線を上げて

スケッチ帳をパラパラとめくった。

あるページでとまり

じつと見つめている。

私だ。

ハナペチャの見慣れた力才が
そこにはあつた。

私を描いてくれたんだ。

心臓がドキドキした。

何分くらいそこに立っていたんだろう。
動けなかった。

ただのスケッチの練習だよ。

自分にいきかせた。

普通に挨拶してちよつとしゃべっても
いいじゃない。

彼に声はかけられなかった。

あそこでもし

彼が振り向いていたら。

もし

私が声をかけていたら。

「素敵なストーリーだね。

完璧よ、リタ。」

キャシーは喜んでくれた。

私は青かったハートに

ピンクを重ねて塗った。

まだ真っ赤にはできないけど

ハートが死ぬことはなさそうだ。

東京に帰ったらヘアカットにいこう。

Kと別れてから

美容院に行つてない。

東京は

季節の変わり目の雨が続いていた。

旅から帰って

荒れた生活の何かが変わった
ということとはなかったけれど
とにかく

「投げやり」はやめた。

何事も丁寧を考えてからやるんだ。

そうすれば

いつか立ち直れる。

と思うことにした。

そういえば

アパートの近くに美容院があったな。

あそこでいいや。

「いらつしやいませー。

あら、こちらはじめてねえ。」

いきなり女コトバのお兄さんですか。

ま、いいや。楽しそうだし。

「ずいぶんな寝グセですねえ。お近くなのかしら？」

「す、すみません。」

「もったいないわよー、若いのにー。

あたしね、サトルコ。

どうぞよろしく。

一生懸命きれいにしますよ。」

「はい。なんとかしてください。」

「あははは！大丈夫よ！リラックスリラックス！」

細かい静かな雨が

やさしく見えた。

プラトニックな恋

にさえもならなかった
だけ大切な
恋の話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8714c/>

結婚するまで

2010年12月21日14時53分発行